様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　5 月　28 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０７５２
研究課題名（和文）ブルーノ・タウト（１８８０年-１９３８年）のジードルンクとベルリンの都市社会
研究課題名（英文）Bruno Taut(1880-1938) and the city society of Berlin

研究代表者
北村　昌史（KITAMURA MASAFUMI）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20242993

研究成果の概要（和文）：ドイツの建築家ブルーノ・タウト（1880 年—1938 年）が、ヴァイマル期のベルリンに建てた１万２千戸におよぶジードルンクについて、建築史や都市計画史の観点ではなく、都市社会史的に研究を進めた。この間、2010 年３月 1 日から 2011 年 1 月 30 日までの、勤務先の在外研究員制度に基づいた現地調査もふまえ、ベルリン南西部のツェーレンドルフにある森のジードルンクに焦点をあて、その社会史的分析をおこなった。

研究成果の概要（英文）：This project made the research on the settlements, which were planted by German Architect Bruno Taut(1880-1938) in Berlin in the time of Weimar republic, not on the viewpoint of the history of architecture or city planning, but on that of the social history of city. Twelve thousand family could live in these settlements. From 1.3. 2010 to 30. 1. 2011 Kitamura made the field research of settlements in Berlin, which was funded by Osaka City University. This project was carried on the results of this field research too. This project focused on the forest settlement (Waldsiedlung) in Zehldndorf, which is located in the south-western part of Berlin, and made the socialhistorical analysis of this settlement.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	600,000	180.000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：ブルーノ・タウト・ベルリン・都市社会・ヴァイマール共和国

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究課題は、ドイツの建築家ブルーノ・タウトが 1920 年代後半のベルリンで建築を進めたジードルンクを、当時の都市社会の変動の中に位置づけることにより評価をおこなう。タウトのジードルンクは、ベルリン全体で約 40 ヶ所に散らばり、１万２千世帯に住居を提供した。

(2) 申請者は、19 世紀ドイツの住宅改革運動についてベルリンに焦点をあてて研究を進めてきたが、時代的に後の時代に射程を広げてその研究の位置づけを明確にしようとするものである。

２．研究の目的

(1)　タウトの建築活動については 1980 年代以降注目されるようになったが、その際建築史・美術史の観点から建物そのものに焦点をあてて研究がなされてきた。

(2)　それに対して、本研究課題が目指すのは、ヴァイマル期ベルリン社会の変化の具体的コンテクストのなかにタウトの建築を位置づけることである。タウトのジードルンクの研究を進めると同時に、その成果と、ベルリン全体のみならず、個々の地域の社会史的情報を突き合わせて、タウトの建築を当時のベルリン社会の変化の中に積極的に位置付けていく。

(3)　その成果を申請者が年来進めてきた 19 世紀の住宅改革運動と関連付けることが本研究課題の最終的目的である。

「森のジードルンク」の光景

３．研究の方法

(1)　ブルーノ・タウト関連の基本的史料や情報の網羅的収集を中心に進めつつ、ベルリンにおける実地調査もおこない、タウトのジードルンクの体系的分析のための史料的土台を構築する。タウト関連の基本史料の収集には復刻版や古書の収集とともに、国内外の図書館・資料館での調査をおこなわなければならない。国内では、ドイツの建築史関連の資料が豊富な東京大学工学部図書館および京都大学工学部図書館・附属図書館に加え、高崎にあるブルーノ・タウト資料館において資料収集をおこなう。ドイツにおいてタウトの活動を追うために調査に赴くべきは、ベルリンにある芸術アカデミーのブルーノ・タウト・アルヒーフであろう。

(2)　ヴァイマル期のベルリンの社会史的研究を進めるためにはベルリン市統計局の発行する『年報』が必須の史料であり、統計レベルのデータはほぼこれに依拠して研究を進めることができる。この『年報』は 1860 年代以来連綿と刊行されており、ヴァイマル期のベルリンを統計的に長いタイムスパンの中におくのに有効である。

(3)　独特のデザインと色彩を伴うタウトのジードルンクを当時の社会に位置づけるためには、ベルリン全体や個々の地域における、住民の社会意識や都市景観などの質的な情報もふまえる必要がある。この点については、1990 年代以来進んでいるベルリン全体や市内の個々の地域の社会史的研究にとりあえず依拠して研究を進め、そうした文献の体系的かつ網羅的収集を着手する。

(4)　タウトの建設したジードルンクの多くは現在でも住居として利用されている。タウトの建築家としての思想を分析するには、文献史料の分析だけでは不十分であり、現存するジードルンクおよびその周辺地域の実地調査をおこない、タウトが住宅や建物に込めた思想を現場において実感する必要もある。また、日本にける唯一の建築家としての作品である日向邸（熱海）や実現しなかった生駒山上ジードルンクの建築予定地の調査もおこなう。先行研究を利用してあらかじめ建物の図面などについて下調べをした上で、建物の外観や周辺の環境を観察し、写真撮影をおこなう。可能ならば、建物の内部も見学や住民への聞き取りもおこなうことも考えている。

４．研究成果

(1)　2009 年度と 2010 年度にはブルーノ・タウトの先行研究を体系的に収集し、それらについて網羅的に検討を加えた。その結果、現時点では、この建築家に関する研究は、日本における研究とドイツ本国の研究を別々に語らなければならないことを認識するに至った。

日本におけるタウト研究は、もっぱら 1933 年に彼が日本に亡命してきてからの活動に焦点があてられ、その際日本文化について彼が書いた文章の翻訳が利用されて、彼の思想や建築観が分析されている。彼のドイツでの活動やドイツ語で書かれた著作・論文、さらには 1980 年代以降活性化したタウト研究の成果は十分利用されてきたとはいいがたい。近年ではそうした限界を打破する動きは出てきているものの、全体的に日本のタウト研究はこの建築家の活動の全体を十分把握してきたとはいいがたい。

ドイツにおける研究には次の３点を指摘しておこう。まず、建築史の観点からここ 20 年ほどドイツにおけるタウトの建築の一次史料に立脚した解明がほぼ全ての建物について進みつつあるが、そうした研究には本研究が目指すような社会史的視点は欠如している。次に、日本や、彼が日本の次の亡命先として選び、そこで客死したトルコにおけるタウトの活動については十分検討されてきたとはいいがたい。タウトの建築論・都市論の集大成ともいうべき『建築芸術論』（邦訳岩波書店 1948 年）を理解するには、この両

国での活動を十分理解する必要があるが、シュパイダルをのぞくと、本国の研究はあくまでもドイツのタウトだけに関心を向けている。最後に、これとも関連するが、タウトの建築思想・都市論の発展は十分検討されてきたとはいいがたい。

したがって、タウト研究の課題としては、①ドイツ本国における建築史的研究を摂取しつつ、それらを社会史的研究によって補う。②①の成果をふまえながら、日本におけるタウトの活動を、その原史料（高崎の創造学園大学所蔵）を利用して再検討する。③①と②をふまえながら、『現築芸術論』に至るタウトの建築思想の再検討をおこなう。この3点を解明すべきという認識をえるに至った。

(2)　勤務先の大阪市立大学の在外研究制度により、平成22年3月1日より平成23年1月 30 日までベルリンにおいて研究を進める機会をえたのを利用して、次のような研究を進めていた。ベルリン工科大学の Center for Metoropolitan Studies を受け入れ機関とし、主に 1920 年代ベルリンで展開した社会的住宅建設の実態を、ブルーノ・タウトが設計したジードルンクに焦点を合わせて研究を進めた。滞在期間中、ベルリンにある Staatbibliothek（州立図書館）、Stadtbibliothek（市図書館）、Landesarchiv（地方文書館）、 Zehlendorf Heimatmuseum（ツェーレンドルフ郷土博物館）、 Akademie der Kunst（芸術アカデミー）などで、タウトの著作や論文、彼が設計したジードルンクの代表の一つであるツェーレンドルフ地区の「森のジードルンク」、および1920年代後半からのドイツの建築界で繰り広げられた「屋根論争」（平屋根がよいかとんがり屋根がよいかの論争）に関する史料の調査をおこなった。タウトがベルリンで建設した 40 近くにのぼるジードルンクの実地調査もおこない、文献史料からだけではうかがい知ることのできない、知見を得ることが来た。滞在中は「森のジードルンク」のタウト設計の住居に居を構え、生活の実感のレベルからタウトが住居に込めた思想を理解しようとした。

タウト設計の住居の内部（森のジードルンク）

同時代に建築されたベルリンおよびドイツ各地のジードルンクや、当時活発におこなわれた建築博覧会についても文献および実地調査をおこなった。

(3)　以上の研究の結果、建築史の視点から、従来は建物やせいぜいジードルンク単位でしかとらえられてこなかった、タウトの建築に対して、当時の建築界の思潮や実際に入居した住民の状況などの点から「社会史」的にとらえる必要性を再確認し、そのための調査を「森のジードルンク」を中心に十分に遂行できた。とくに、タウトの建築も、当時大論争を巻き起こした「屋根論争」の流れの中で位置づけるべきこと、および入居した住民が協会や祭りを組織して、ジードルンクに一つの共同体を作ろうとしたことを明らかにできたことは、重要な成果とおもわれる。

タウト自身の著作に関しても、ドイツで収集できる文献はほぼ網羅的に収集した。1933年に日本に亡命して以降のタウトの著作は、高崎の創造学園大学を中心にほぼ日本各地に収蔵されおり、タウト研究に関しては日本における史料調査が不可欠であることを確認した。史料の面だけではなく、タウト晩年に著された、彼の建築観の集大成である『建築芸術論』は、彼の３年半に及ぶ日本滞在における見聞と思索も大きく反映しており、彼の建築思想家としての評価のためには、日本におけるタウトの調査も不可欠であり、その点日本において研究を遂行する者がタウト研究に国際的に大きく貢献する可能性があることも認識した。今後、このテーマに関する研究成果は、日本語のみならず、ドイツ語や英語で積極的に海外に発信する必要があるであろう。

タウト設計のジードルンク（馬蹄形ジードルンク）

(4)　屋根戦争については、建築史の通史的叙述においては「有名」と記されているが、立入って検討を加えた文献はまだない。したがって、本研究課題のもと建築関係の雑誌や関連文献の調査をおこない、論争の経過を明らかにした。伝統的に「屋根」は建築の際に重要視される要素ではなく、建築関係の雑誌でもそれほどとりあげられてこなかったが、1923

年にバウハウスがヴァイマールに建てた Das Haus am Horn が、建築関係の雑誌における「屋根」の扱いを完全に変えた。合理性に基づいて設計がおこなわれ建物全体が直線的に構成されたが、屋根は平屋根であった。これをきっかけに、「新しい建築」を標榜する建築家が平屋根を主張し、伝統的な傾向にある建築家がとんがり屋根を擁護し、論争となった。1927 年に平屋根派が企画したのがシュトゥットガルトで開催された建築博覧会であった。これが国際的に名声を博したために、とんがり屋根派が対抗して 1928 年に建築博覧会を開催した。これは、平屋根の「森のジードルンク」のわきに約 30 軒のとんがり屋根の建物を並べたものである。この企画は、建築費、設計、都市景観の点で「失敗」と評され、論争は終息に向かう。平屋根派は、自分たちが勝利したと認識するが、大勢はクライアント、建築費、景観などを考慮して屋根の形状が決まるものであり、どちらが優れているというものではないという方向で落ち着く。1933 年にナチスが政権を獲得すると、「新しい建築」を嫌うナチスのもととんがり屋根派の巻き返しが見られた。

森のジードルンクの建物の外観

(5)　この論争は、「森のジードルンク」の住民の生活にも反映する。1927 年、最初に建てられた地域の住民が入居をはじめる。1928 年に住民は居住者協会を組織し、翌年 9 月に彼らの祭「フィシュタールの祭」を開催する。この祭りは、住民相互の人間関係を固めるという目的もあるが他に次の点を考慮しておこなわれたものである。①裕福な階層の邸宅地であったツェーレンドルフ住民の反対を押し切って、民衆向けの集合住宅を作ったものであるので、この地域をツェーレンドルフの地域社会の中に溶け込ませようという意図がある。②1928 年の建築博覧会は、地域に対立の図式をもちこむものであった。したがって、祭においては「森のジードルンク」のわきに建てられた建物の住民やそれを建てた建築会社を統合しよいという意思がある。したがって、「森のジードルンク」には当時のドイツの建築家を二分した大論争が色濃く反映したことになる。その後、「森のジードルンク」の新しい地域にタウト設計の建物がさらに建てられると、祭の重点はこの新しい地域の住民を統合する方向に移っている。1933 年にナチス政権が誕生すると、画一化政策のもと居住者協会は解散させられ、この協会が組織していた「フィシュタールの祭」も中止を余儀なくされる。第 2 次世界大戦後にこの祭りは復活する。

フィシュタールの祭りのパンフレット（1932 年）

(6)　以上で研究成果の(1)でのべた３つの課題のうち①については十分果たした。②と③についてはもともと本研究の対象外であり、今後解決していきたい。当初予定していたタウトのジードルンクの社会史研究は十分おこないえたといえる。この成果は、現在、公表に向けて整理中であり、19 世紀以来のベルリン都市社会の変化の中にタウトのジードルンクを位置づけるという最終目標は、そうした作業の中で必然的に果たされるものと考える。

そのための準備作業として次の 2 つ の作業をおこなった。

まず、「森のジードルンク」の祭で作用していたのは互酬性の原理であり、19 世 紀ドイツ社会に機能していた互酬性について、見通しをつける作業をおこなった。それは、雑誌論文①として公表した。次に、「森のジードルン ク」に関する実証研究の意義を、比較史のコンテクストにおくために大阪の九条・西九条・川口・松島の、明治時代における歴史を調査し、そ の成果は 2011 年 11 月 1 日 にハンブルクで行われた国際シンポジウ

ムにおいて報告した。今後、以上の成果をも参照しつつ、「森のジードルンク」の社会史研究を総括していく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 北村昌史「互酬性から見た近代ドイツ社会――結社と社会国家」『パブリックヒストリー』第９号、2012 年 2 月 29 日、54-63 頁、査読無。

〔学会発表〕（計１件）
① Masafumi Kitamura, “Stadtteil-entwicklungsgeschichte von Kujo und ihre Umgebung’, Internationales Symposium: “Stadtteil mit Gemütlichkeit” zu gestalten. Area Management in Osaka und Hamburg, Hafen City University, Hamburg, 1. November 2011.

〔図書〕（計１件）
① 上垣豊・小山哲・杉本淑彦・山田史郎編『大学で学ぶ西洋史　２　近現代』ミネルヴァ書房、2011 年４月 20 日、145-153 頁を担当。

〔その他〕
ホームページ等
http://www.osaka-cu.ac.jp/cooperation/rcii/data/kenkyuuka/bungaku/09.pdf

６．研究組織
(1)研究代表者
北村　昌史（KITAMURA MASAFUMI）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20242993

(2)研究分担者
該当なし　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
該当なし（　　）

研究者番号：